

No	交付金対象事業名称		事業目的・概要									
1	持続可能な農村エコシステム構築事業		交通分野においては、農村エリアの交通に課題があるため、共助型地域交通物流システムを導入し、ドライバー不足を解消しヒト・モノの移動を降雪時期を含め最適化を図る。農業分野においては、飼料の確保に向けて国内の生産資源を最大限活用する生産基盤強化としての耕畜連携が、食料安全保障の観点でも不可欠であるため、国際標準での完全無人大型酪農地帯のISOBUS開発実証(国際標準のロボティクス・衛星データ)により労働時間を削減し、作業履歴データを蓄積し、営農システム(施肥、散布量等)にデータを活用する。さらに、収量を予測するとともに、生産管理を的確に行うことで、省力化・高付加価値化を行うために、気象・農業ビッグデータから収穫時期予測を行う。また、気象条件の変化に伴う生育作物の予測(100年後の既存作物の適正予測)を行うことで、長期予測データに基づいた農業経営技術を構築する。通信分野においては、本事業で扱うデータが膨大になることから、高速安全な通信とデータ保管の安全性をブロックチェーンを活用した分散ストレージシステムにて確保し、通信基盤のメッシュ化(衛星スターリンク)を行うことで、災害にも強い高速安全な通信とデータ保管の安全性を確保する。									
総合戦略の位置づけ												
基本目標1、2、4 横断的な目標2												
事業開始		事業終了										
令和5年4月		令和8年3月										
実施事業名			総事業費	交付金対象経費	財源内訳			実施内容				
					交付金	一般財源等						
ソフト内訳1	共助型地域交通物流システム		71,350,232	71,350,232	35,675,116	35,675,116		自動運転車両の運行範囲を拡大し、更別市街地と上更別市街地を結びニーズ調査を実施した。また、自動配送については雪道での実証を実施。サービス参加を促すデマンド運行は定着しつつある。				
ソフト内訳2	国際競争拠点を形成する新たな農村エコシステムの構築		96,520,720	96,520,720	48,260,360	48,260,360		ずも開花予測システム構築、ロボットで使う作業機のISOBUS開発、ドローン可変施肥実証				
ソフト内訳3	ブロックチェーンを活用した分散ストレージシステム		25,707,000	25,707,000	12,853,500	12,853,500		分散ストレージシステムの構築を進めた。				
ソフト内訳4	通信基盤のメッシュ化及びセキュア通信		3,982,544	3,982,544	1,991,272	1,991,272		スターリンクの設置運用を開始するとともに、共助Wi-Fiを拡大のためにナープネットを構築し運用を開始した。				
小計(ソフト)			197,560,496	197,560,496	98,780,248	98,780,248						
ハード内訳1	共助型地域交通物流システム		25,000,000	25,000,000	12,500,000	12,500,000		国産EVバスの購入。				
ハード内訳4	通信基盤のメッシュ化及びセキュア通信		14,653,003	14,653,003	7,326,501	7,326,502		スターリンクの設置及びナープネットの構築。				
小計(ハード)			39,653,003	39,653,003	19,826,501	19,826,502						
合計			237,213,499	237,213,499	118,606,749	118,606,750						
重要業績評価指標(KPI)			単位	事業開始前	KPI	R5	R6	R7	R8	R9	累計増加分	夢大地さらべつ推進委員会評価
1	共助型地域交通物流システム利用者の実数		%	0.00	目標値	30.00	20.00	20.00	20.00	20.00	110.00	概ね問題なく事業を推進しており、各事業実施内容スケジュール・KPIについて改善・修正等の意見なし。
					実績値	872.00					872.00	
2	自動農機(無人ロボットトラクター・ドローン)の導入数		台	2	目標値	2	3	5	10	10	30	
					実績値	2					2	
3	離農者数の減少		人	0	目標値	2	1	0	0	0	3	
					実績値	3					3	
4	企業誘致の増加		社	0	目標値	1	1	1	0	0	3	
					実績値	0					0	
現況・課題			<ul style="list-style-type: none"> 地域交通物流については、自動運転車両の運行についてオペレーターが不足しており、課題の一つである。また、道交法改正により配送ロボットの認証が受けられず冬道実証のみに留まった。 スマート農業は、開花予測は開花日の前後2～3日の誤差、農作業機器についてはISOBUSによる農機具制御システムの開発中、ドローンによる可変施肥については230haの施肥を実施。 分散ストレージシステムは、セキュリティに課題があることから、強化するべく現在対応をしている。 通信基盤のメッシュ化については、一部通信環境が悪い箇所が見られる。 									
阻害要因・分析・対応			<ul style="list-style-type: none"> スマート農業でのISOBUS開発については、メインで開発していた事業所が開発撤退となり、残ったメンバーにて開発を引き継ぐこととなった。 事業全体において、計画の策定時よりも資材費や人件費が高騰しているため、実施したい事業を絞って実施せざるを得ない状況になっている。 									
今後の方針・見直し			<ul style="list-style-type: none"> 地域交通物流については、自動運転のレベル向上を目指すとともに、配送ロボットの現在の利用方法の変更も含め検討を進めていく。 スマート農業は、開花予測について本村で栽培している主要4品目(芋・豆・麦・ビート)の内から、横展開させる。また、ドローンの可変施肥については、今後も継続して事業を進める。ISOBUSについては、農機メーカーに対応したものの開発をすることも検討しながら、商品化に持ち込む。 分散ストレージシステムについては、利用料を徴収できる仕組みの検討を進める。 通信基盤については、ナープネットのネットワークを1カ所追加するとともに、既存の共助Wi-Fiとの連携を進める。 									